



若川美治

新平家物語

第二卷

九重の巻

昭和二十六年七月二十五日 印刷
昭和二十六年七月三十日 發行

定價 二八〇圓

新・平家物語 第二卷 九重の巻

著 者 吉 川 英 治

發行者 杉 山 胤 太 郎

印刷所 東京都新宿區市ヶ谷加賀町
大日本印刷株式會社

發行所 東京丸ノ内
大阪中之島
小倉市砂津
朝 日 新 聞 社

九重の巻 目次

大比叡

三

神輿振り

一〇

人間到るところ人間あり

一九

螢

二八

あらしの前

三八

案山子陣

四七

一投石

五六

石の雨

六四

幼帝御一世	苦い菊酒	攝政爭奪	土用曆	霰御所	煩惱ぐるま	立后二花	鞠	童女像	野風	美しき家族	惡左府
-------	------	------	-----	-----	-------	------	---	-----	----	-------	-----

一七三	一六四	一五九	一五一	一四二	一三二	一二三	一一六	一〇八	一〇二	八七	七三
-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	----	----

源太産衣	白旗の下	零余子艸子	赤旗の下	保元・地獄序曲	如法闇夜	二つの門	茨	柳ノ水	釘	熊野巫女	女の國
------	------	-------	------	---------	------	------	---	-----	---	------	-----

二八四	二七一	二六一	二四七	二四〇	二三三	二二四	二一二	一九九	一八九	一八三	一七九
-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----

九
重
の
巻

大比叡

『法の御山』と、人々はそこを云ふ。

四季、朝に夕に、都の辻からも、遠くなく、近くもなく、加茂の上流に眺められる比叡の峰々は、ふと、巷の生活に疲れはてた者の眼には、

『あゝ、あの御山には、この苦患や、人間同士の醜さもあるまいに……』

と、思はれがちであつた。

叡山もまた、人間の住む地上と、それは分つてゐても、なほ、さう思ひたくないものである。

明けても暮れても、咬みあひ、騙しあひ、媚びあひ、陥しあひ——の餓鬼道を、周圍に見てゐる上に——彼方なる、救ひの世界までが、同じだとしたら、人間はいつたい何を信じ、どこに安らぐのか。

『——いや。あそこだけには、眞實の灯が、不斷に點つてゐる』と、観るだけでも、衆生は、観

てゐたい。

そして、巷が、欲望の修羅であるほど、どこかでは、御佛たちが、正しい者は、正しと観、善なる者は、善と観てるもの——と、信じたかつた。

無知な願ひかも知れないし、憐れむべき迷ひかもしれないが、然し、善良ではある大部分の衆生は、何かを、心に持ちたかつた。持たずには、今を、生きてゐられない人々であつた。

まことに、あはれと云ふほかはない。

無知、素朴な人間だけに限つてはゐない。人間は、人間である以上、無意識にも、何かにすがつて、生きてゐる。——いや、おれは依存を持たない。おれはおれだけで割りきつて生きてゐる。——といふ唯物主義者も、唯物の信徒にほかならない者だし、唯物も唯心も、愚として冷笑する虚無主義者も、虚無といふ獨信のうつろに、胡坐を組んでひとり悦に入つてゐる婆羅門の行者と、どこか、似かよつてゐる。

衆生は、理念には、惱まない。彼らはたゞ生き喘ぐ本心の底から、たゞこの世の「美」と「信」を持ちたいだけの事だつた。——希ひを、佛陀にかけ、懺悔を、大自然の不思議に涙し、足を伽藍堂塔の莊嚴に運んで、

『——救はせ給へ』

と、素朴に、掌をあはせて、祈るほか、助かる工夫を、知らないのである。

春は、うす紫に。——秋は、金色に。

大比叡、小比叡の峰々は、さうした民衆の彼方にあつた。

ほそい二日月が懸かつてゐる。

四明ヶ嶽の、峻しい道を、病み弱つた狼みたいな影が、よろ、よると、よぢ登つてゆく。
杖にすがつた、一人の、老碩學であつた。

影は、やつと、巖頭に出た。

眼の下の深い谷の間と、縹渺として、果てなく藍い夜空を前に、へな／＼と、坐つた。

『……な、南無——』

掌を合せて、唱へかけると、この老碩學は、さんざんと、涙をたれた。

果ては、オイ／＼と、嬰兒みたいに、聲をあげ、手放しで、泣きじやくる……。

いつたい、平安朝時代の人間は男でも女でも、よく泣いたし、またよく笑つた。喜怒哀樂を、隠さなかつたものである。

神色を眉にだに示さず——といふ風を、人物の厚みとしたのは、もつと後世の日本人であつた。儒學や武士道の影響だつた。

それ以前の、本來の國民性は、歌ふにも率直、踊るにも率直。よろこぶや、大いによろこび、悲しむや、涙を流して泣き、さう人前を、氣にしなかつた。五情六慾の凡愚を、おたがひ認めあつて、生きたのであつた。

——すでに自分たち人間の本性を、理性だけでは處理できない、官能煩惱の、あはれな、夢い、始末のわるい——宿命の子として、觀てゐた人々なので、大自然の悠久にも、佛陀のことはにも、謙虚であり、素直であつた。

東大寺の金銅盧遮那佛も、法隆寺の諸菩薩の像も、それを造つたり、鑿を取つたのは、造佛師であつたが、現はされたものは、かうした信仰の結晶であつた。雜智を交へない純粹な信仰の理想に描かれた三十二相の、御眉や、あの御姿であつた。

今。

四明ヶ嶽の一角から、ひとり宇宙の夜にむかつて、

『南無阿彌陀佛……なむあみだ……なむあみ……だ……ぶ』

と、泣きじやくりの稱名を唱へてゐる奇異な老碩學のまへにも、背光をもつた釋迦、普賢、文

珠の三尊や、二十五菩薩などが、雲に乗つて、彼には、見えてゐたにちがひない。

『お、おゆるし下さい』

地に伏して、彼は、泣き詫びてゐる。

『——身の、凡愚も、わきまへず、衆生を、救はうなどとした私は、自分をすら、救へもせず、いまや、心は、困惑し、智は、智のためにいよく晦く、學問は、學問のため、かへつて、眞理に遠い邪魔ものになつてをります。……かくて、けふ迄の一生は、徒勞でした。法の御山は、惡の深山を現じてゐます。生きてゐる罪科のほども、それ怖ろしく、もうこの山に、生き耐へてゐられません。……あはれ、諸佛のおちかひが、眞ならば、ほんとの、淨土とは、有りうるものか、また人間の中には、望み難いものなのか。——それをお示し下さい。死にきれません……。それもわからないうちに』

きれぐれに、長々と、彼は、獨り訴へ、獨り嘆いた。

この老碩學は、若くして、つぶさに、世路の苦難をなめ、どうか、世の悩める人々を救ふほどな、高僧になりたいもの——といふ發願から、この叡山に、一生を託した者のひとりだつた。

そのため、彼は、人生の殆どといへる四十餘年を、破衣素食に耐へ、禁慾の戒を、守りとほした。

七年間といふもの、一日一夜も、缺かすことなく、峰々谷々の、伽藍をめぐつて、血みどろな、素足で、闇夜の工夫も積んだし、また、大藏經の寶庫にはいつて、數年間、陽も見ずに、眼を、佛典にたゞらしたこともある。

つねに、難行道の門に、生命をさらし、欲望をなげうち、諸州をあるいて、他宗の輩と、法論をたゝかはし、碩學の名、一代にかくれもない、高德とはなつた。

かうして、晩年には、僧位も受け、一院の長老となり、いま、叡山に、智識は、多いが、開山佛教の台密禪戒の四理にくはしい高僧といへば、この人のほかにはないともいはれてゐる。ところが。

この碩學も、いまは老いて、しかも、彼の住む、谷間の一院には、たれひとり、寄りつく者はない。

叡山の堂塔は、年ごとに、輪奐の美を加へ、法燈は、中堂にかゞやき、穀倉には、諸國の田富をあつめ、座主以下の智識、學侶、堂衆、稚子、奴僕などの、こゝに衣食する者、數萬といはれてゐるが、この天台繁昌に會つて、彼は、今やまつたく、絶望してゐるものらしい。

『むかし、開山の祖、最澄も、その生涯を終る前に、戒壇問題で——心形久シク勞シテ一生コ、ニ窮マル——と仰せられたといふが、自分も自分の積んできた智識と現實の板ばさみになつて、

昏迷、生きるに力も失つた。……あはれ、死後に、彌陀のお迎へを得たとて、何かせむ。……満山の鴉よ、わしの肉を喰うて、一日の餐となせ！』

碩學は、よろりと立つて、かう喚いた。——と、思ふと、突然、谷底へ、身を投げてしまつた。

神輿振り

三塔十六谷に住む叡山の法師たちは、まだ勤行にもつかない、未明の夢を、ふいに、醒まされた。

『大講堂の鐘が鳴るぞうつ……。大講堂にあつまれいつ……。』

誰かは知れぬが、どこかで、雲を呼ぶやうに、どなつてゐる。

——ごうん、ごうん、ごうん……。

鳴りやまない鐘の音を耳にしながら、法師たちは、下に、鎧を着こみ、上に法衣をまとひ、太刀を帶び、薙刀をもち——老師の場合は、竹の入堂杖をつき——われ先にと、谷々から、雲の湧くやうに、登つてゆく。

六月のなかば過ぎ。短か夜の空も、まだ暗く、星が、まばらである。

法師たちは、道々、あちこちの、堂舎や院の屋根を見ることが、唇へ、手をかざして、

『大講堂に立ち廻られよ。鐘が鳴つたぞ。——滿山の大衆に、寄れと、告げてゐるぞうつ』

と、呼ばはり、呼ばはり、行くのだつた。

かれ等は、老若ともに、くわ頭くわづと稱して、長絹や破れ袈裟けさで、覆面する奇妙な習慣をもつてゐる。

童わらんべや、雜人ざふじんたちは、直垂ひたしの袖で、顔をつむ。

足もとは、山足駄か、草履を、ふつうには、履いてゐるが、大講堂の非常鐘ひじやうかねが鳴る場合は、衆議に依つて、たゞちに、下山するかもしれないので、皆、草鞋わらじばきで、

『何事の僉議きんぎか』

と、武者の出陣と同様に、集合の庭へ、急ぐのであつた。

『や、や。……人が死んでゐるぞ』

四明ヶ嶽の谷道で、ひとりの堂衆が、草むらに、立ちどまつた。

『おうつ、年よりぢやないか。どこの老僧であらう』

岩に頭でも打ちつけたか、死骸は、血にまみれ、顔もさだかでないが——覗きあつてゐた法師のひとりが、死骸の手くびに懸けてある珠數じゆずを、篤とくと見て、

『あつ、西塔さいたふの常行堂に病んでゐた實鏡じつきやう法印だ。實鏡御坊にちがひない』